日本臨床教育学会 第８回研究大会のご案内（第２次）

第８回大会を迎える

日本臨床教育学会会長　田中 孝彦

日本臨床教育学会の第８回大会は，東大阪大学で開かれます。会場をお貸しいただいた東大阪大学のみなさまに，心からお礼を申し上げます。また，準備にあたってくださった関西の会員を中心とする実行委員会のみなさまに感謝いたします。

５年ほどまえのある日，私は，東大阪大学の「こども研究センター」を訪ね，そこで行われていた「子どもひろば」と呼ばれている活動を見せてもらったことがあります。それは，地域の乳幼児たちとその母親たちの集まりでした。子どもたちは，保育士を含む数人のスタッフの人々に見守られながら，思い思いに遊んでいました。母親たちは，それを見守りながら，子どものことや子育てのことを，心配事を含めてあれこれ語り合っていました。そこには，ゆったりした時間が流れていて，気がついたら，私自身が，はいはいを始めたばかりの赤ちゃんの一人に，しばらく遊んでもらってしまっていたことを想い出します。

東大阪大学の「大学案内」には，「こども研究センター」は「こども学部・こども学科」の「研究施設」であり，その「こども学」とは，「子どもをとりまく問題を大人の視点からのみ捉えるのではなく，子どもの視点にも立って考える学問」であると記されています。私は，東大阪大学で練られてきた「こども学」の構想と，私たちがその開拓を試みている「臨床教育学」の構想との間には，大きな重なりがあるように感じています。私は，今回の大会が，東大阪大学でのそうした「こども学」の研究・教育の蓄積が生かされ，それに学びながら臨床教育学の構想を深めあう機会となることを，心から願っています。

６月に「大阪北部地震」が起こり，７月に入って広島・岡山・愛媛など西日本の広い地域にわたる豪雨・河川の氾濫・土砂崩れなどが発生し，多くのいのちが失われ，その後に記録的な「猛暑」が続くなど，今回の大会は，自然的にも社会的にも極めて不安定な状態が続くなかで行われます。会員のみなさんの間にも，心身の疲れがさまざまに蓄積していることと推察しています。どうか健康に留意していただき，研究・討論を深めていただき，落ち着いた元気がみなぎってくるような大会にしていただきますよう，お願いいたします。

１．大会日程

＊理事会：9月28日（金）１６：３０～19：00

＊1日目：9月29日（土）

9:30　10:00　12:00　13:00　15:00　15:20　17:20

受付	自由研究発表（A） 一般研究	昼 食	課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・ Ⅳ・特別課題研究	休 憩	シンポジウムⅠ 現地大会企画

＊ 18：00～20：00　情報交換会　KKR ホテル大阪

＊2日目：9月30日（日）

9:00　9:30　10:10　10:30　12:30　13:30　15:30

受付	総会	休 憩	シンポジウムⅡ 学会主催企画	昼 食	自由研究発表（B） 実践事例研究

2．大会会場：　東大阪大学（〒577-8567　東大阪市西堤学園町３−１−１）

近郊アクセスマップ

交通アクセス

■ Osaka Metro（地下鉄）中央線「高井田駅」下車・・・徒歩 14 分

Osaka Metro（地下鉄）中央線「高井田駅」は 3 番出口，また JR おおさか東線「高井田中央駅」は改札右側の，阪神高速道路の高架が見える中央大通りに出ます。その中央大通りを左（東方向）方向に進んで 2 つ目の信号を右折（南方向）して直進。2 つ目の信号で左折し，突き当たりを右折し次の信号を左折，60m 先の左手に本学の正門があります。

■ JR おおさか東線「高井田中央駅」下車・・・徒歩 14 分

■ 近鉄「河内小阪駅」下車・・・徒歩 18 分

改札を出て右へ。「河内小阪駅」北側駅前広場のスクランブル交差点を渡って右へ。
ビルの角を左（北方向）へ曲がって直進。3 つ目の信号を渡って右（東方向）へ 20m，そこで左折（北方向）し直進。
2 つ目（右側に西堤小学校がある）の信号を右折し，60m 先の左側に本学の正門があります。

■ JR 学研都市線「徳庵駅」下車，東出口から近鉄バス「小阪駅前」行き「東大阪大学前」下車すぐ

改札を出て右（東出口）へ。階段を下りて 30m 先の四つ角（1 つ目）を右折，60m 先の右側にロータリーがあり，バス停とタクシー乗り場があります。近鉄バス「小阪駅前」行きに乗り，10 分くらいで「東大阪大学前」バス停，バスを下車し前方の信号を右折，150m 先右側に本学の入口があります。

３．大会実行委員会

実行委員長　：渡邉　由之（東大阪大学）
副実行委員長　：吉岡　眞知子（東大阪大学）
実 行 委 員　：石井　邦也（聖和保育園）
：市橋　正己（東大阪大学）
：今井　美樹（東大阪大学）
：上田　孝俊（武庫川女子大学）
：春日井　敏之（立命館大学）
：川谷　和子（東大阪大学）
：杉本　孝美（東大阪大学）
：田中　佑弥（武庫川女子大学大学院博士後期課程）
：中村　又一（武庫川臨床教育学会）
：長谷川　由香（佛教大学）
：早川　りか（藍野大学）
：春木　美治（武庫川臨床教育学会）
：福井　雅英（滋賀県立大学）
：村越　直子（武庫川女子大学）
：山岡　雅博（立命館大学）
：山内　清郎（立命館大学）
：吉益　敏文（豊岡短期大学）

大会実行委員長挨拶

2018 年 9 月 29 日(土)，30 日(日)の 2 日間にわたり，日本臨床教育学会第８回研究大会が東大阪大学にて開催されます。小さな大学ではありますが，豊かな学びあいを提供できるよう準備を進めております。

本校は, 家政科を専門とする女子短期大学として 1965 年に開設しました。大学開設は 2003 年, 全国初の「こども学部」を擁する大学として保育・教育に携わる専門職養成を始めました。在学生の多くは近隣地域から通っていることもあり，少人数の良さを生かしながら学生・教員・地域の距離が近いのが特徴の一つです。大会シンポジウムの一つは，本校の特徴を前面に出した報告をさせて頂きます。大学過多な状況のなか，教育実践・教育研究の質を問われる時代となりました。だからこそ，肩の力を抜き，等身大で語り合えれば幸いです。

ここ東大阪市は「花園」の名で知られるようにラグビーの街です。また，精密部品を世界に送り出す中小企業が多数存在するものづくりの街でもあります。静かな下町の雰囲気の中で議論を交わし，情報交換会は大阪城の傍に移動します。全国の参加者と語り合い，実のあるつながりが生まれることを願っています。

酷暑和らぐ晩夏となることを期待しつつ，多くの方のご参加をお待ちしております。

渡邉　由之（東大阪大学）

インフォメーション

１．大会受付

受付は，大会会場となる東大阪大学で行います。
受付の開始時間は，以下の通りです。

＊　１日目：9月２９日（土）９：３０～　　受付：9号館１階ロビー
＊　２日目：9月３０日（日）９：００～　　受付：9号館１階ロビー

２．大会参加費と参加申し込み方法

大会参加費は，下記の金額を大会当日に＜受付＞でお支払いください。

＊　一　　般：**5,000円**
＊　学生・院生：**2,000円**

※　上記の大会参加費は「発表要旨集録」代を含みます。

＊　大会参加費は，当日の申し込み・支払いのみとなります。大会には，会員以外の方でも「当日会員」として上記の参加費でご参加いただけます。なお，大会に不参加で「発表要旨集録」の入手を希望される方は，大会以降に，１部2,000円で頒布します。ご希望の方は日本臨床教育学会ウェブサイトからお申し込みください。

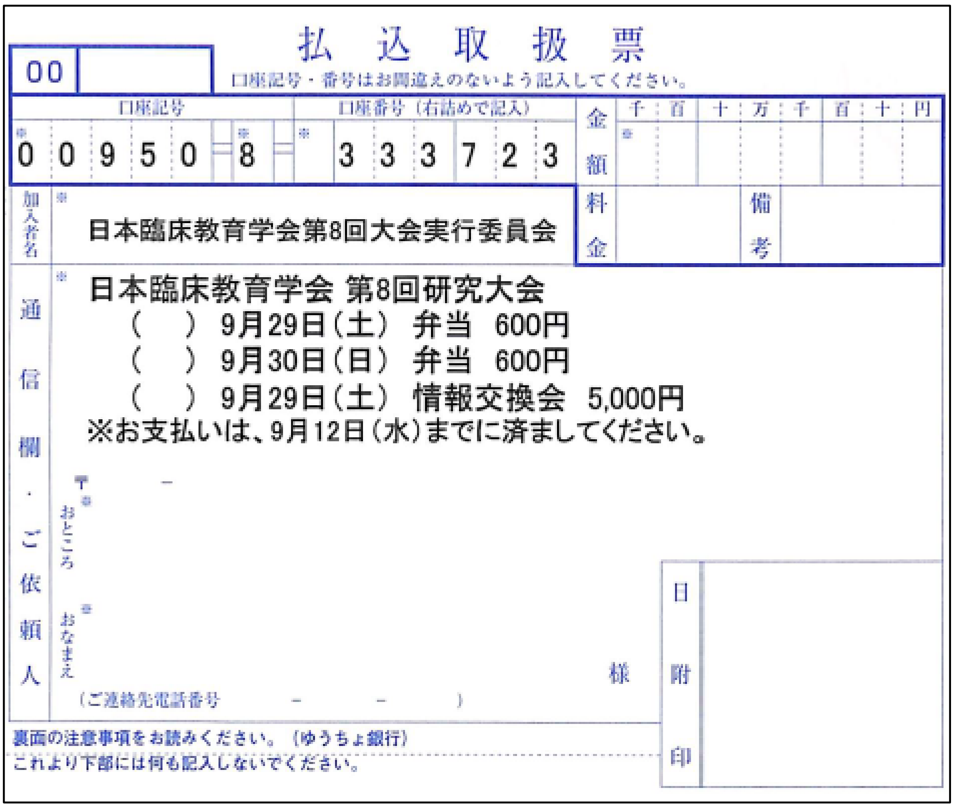
３．弁当（昼食）と情報交換会費の＜事前申し込み＞

＜重要＞　弁当と情報交換会については，準備の都合により事前申し込みを行います。
＊　情報交換会費：**5,000円**
＊　弁当（昼食）費：１食につき**600円**（２日間の場合**1,200円**）
＊　大学から会場への移動はタクシーが安価かつ便利です。ご希望の方には、当日タクシーを用意しますので，現地にて，利用希望をお知らせください。乗り合わせていただければ，一人当たり500円程度となります。

弁当と情報交換会の事前申し込みにつきましては，下記の「口座記号」「口座番号」「加入者名」宛てに，同封の払込取扱票，又は郵便局備え付けの払込取扱票で事前にお支払いください。（以下のサンプルをご参照ください）。

＊＊＊＜払込取扱票のサンプル＞＊＊＊

口座記号：00950-8　口座番号：333723



払 込 取 扱 票

00

口座記号・番号はお間違えのないよう記入してください。

口座記号	口座番号（右詰めで記入）	金額（千 百 十 万 千 百 十 円）
0 0 9 5 0 － 8	3 3 3 7 2 3	

加入者名：日本臨床教育学会第8回大会実行委員会

料金　　備考

通信欄・ご依頼人

日本臨床教育学会 第8回研究大会
（　）9月29日（土） 弁当 600円
（　）9月30日（日） 弁当 600円
（　）9月29日（土） 情報交換会 5,000円
※お支払いは、9月12日（水）までに済ましてください。

〒　－
おところ
おなまえ　　様
（ご連絡先電話番号　－　－　）

日附印

裏面の注意事項をお読みください。（ゆうちょ銀行）
これより下部には何も記入しないでください。

注意：上記＜払込取扱票＞による申し込みの締切は，９月１２日（水）です。

① 弁当の販売は，事前注文のみとなりますので，あらかじめご了承ください。なお両日ともに学内の食堂は営業しておりません。大学周辺には，コンビニ，食堂などがいくつかありますが，土・日曜日は閉店のところもありますので，弁当を事前に注文していただく方が無難だと思われます。弁当を事前にお申し込みいただいた方には，大会両日とも，受付の付近にてお渡しいたします。その際は，お名前をお申し出ください。

② 情報交換会は，９月２９日（土）18：00～20：00 に，KKR ホテル大阪において行います。参加ご希望の方は，＜払込取扱票＞により，事前にお申し込みください。なお，払込取扱票による事前申込なしに情報交換会へ当日参加を希望される場合は，６,000 円（税込）の参加費をいただきますのでご了承ください。

４．ホテル宿泊料金の優待について

情報交換会を開催する「KKR ホテル大阪」にてご宿泊される場合，電話予約時に「東大阪大学での大会参加」と伝えていただければ，優待料金（城側シングル・朝食付き：11,700 円，街側シングル・朝食付き：10,700 円）で宿泊できます。お早めのご予約をお願いいたします。

❋ KKR ホテル大阪　（電話番号）06-6981-1122（代表）

５．発表・提案の準備に関するお願い

課題研究及びシンポジウムの提案者，並びに自由研究発表者のみなさまには，以下のことをお願いいたします。

❋ 発表要旨集録以外の**当日配布資料**がある場合には，大会当日，各自で以下の部数を印刷して，発表会場に直接ご持参ください。

- 課題研究（Ⅰ～Ⅳ及び特別）の提案者は，**50** 部
- シンポジウムⅠ・Ⅱの提案者は，**100** 部
- 自由研究（一般研究・実践事例研究）の提案者は，**50** 部

なお，大会当日，会場におけるコピー機や印刷機等の使用はできません。不足分が生じた場合にも，事務局では対応しかねますので，あらかじめ各自で十分な部数をご準備ください。

❋ 利用できる機器は，PC 用プロジェクターです。**PC は原則として会場で準備しておりません**ので，ご持参いただきますようお願い申し上げます。機器の調整は，各発表会場で各自の責任で行ってください。

❋ 発表又は提案では，日本臨床教育学会の＜倫理規程＞を遵守してください。とりわけ個人情報の保護を徹底してください。

❋ 発表当日の持ち込みの配布資料等で，提案後に回収を要する資料については，＜回収資料＞であることをあらかじめ明記しておいてください。また，事前に＜回収資料＞があることを司会者にお伝えいただき，当該部会終了後に，提案者の方で速やかに回収してください。

❋ 課題研究やシンポジウムにおける提案者１人の提案時間や提案順序につきましては，各部会によって異なりますので，各担当理事を中心に事前に確認し合っておいてください。また直前にも確認し合ってください。

＊　**自由研究 A（一般研究）**における個人研究の場合，発表時間は 20 分，質疑は 5 分です。また共同研究で発表者が複数いる場合，発表時間は 40 分，質疑は 10 分です。なお，数名の発表が終わった後，編成された部会ごとに，全体討論が 15 分程度予定されています。

＊　**自由研究 B（実践事例研究）**における個人研究の場合，発表時間は 40 分，質疑（カンファレンス）は 20 分です。なお，共同研究で発表者が複数いる場合でも，1 つの発表につき発表時間は 40 分，質疑は 20 分ですのでご注意ください。

６．託児スペースの利用について

大会期間中は，東大阪大学こども研究センター内に託児スペースを設けます。利用を希望される方は，下記のメールアドレスに連絡し，事前予約を行ってください。

＊　保育時間は，29・30 日の両日とも，午前 10：00～12：00，午後 13：00～15：30 となります。午前，午後とも利用できます。なお，9 月 29 日（土）大会 1 日目の**シンポジウムⅠ**のみは，お子様同伴で参加いただくこともできます。

＊　保育料は，おやつ代のみを予定しています。預かり時間，持ち物等の詳細は，事前予約後に，メールにてお知らせいたします。

＊　保育の準備の都合上，ご利用希望者は，**９月２１日（金）20：00** までに事前予約を行ってください。

託児スペースの事前予約はこちらへ: ywatanabe@higashiosaka.ac.jp 大会実行委員会　渡邉由之　宛 ※件名に「託児スペース利用希望」と明記してください。

プログラム１日目

9月29日（土）

９：３０～　大会受付

１０：００～１２：００　自由研究発表（Ａ）：一般研究

１３：００～１５：００　課題研究Ⅰ～Ⅳ，特別課題研究

１５：２０～１７：２０　シンポジウムⅠ：現地大会企画

１８：００～２０：００　情報交換会

自由研究発表（A）：一般研究発表
９月２９日（土） １０：００～１２：００
９号館・９２１教室

一般研究・第１分科会

地域・生活と教師

司　会：本田 伊克（宮城教育大学）
川俣 智路（北海道教育大学）

✻ 地域に生きる子どもと教師のまなざし
－震災後岩手・沿岸の教育実践から学んだこと（その２）－

土屋 直人（岩手大学）

✻ 貧困問題と学力問題の間で苦悩する地域で求められる教師の専門性とは何か
－沖縄の教師の語りの省察を通して－

村上 呂里（琉球大学）
望月 道浩（琉球大学）
山口 剛史（琉球大学）
辻　 雄二（琉球大学）

✻ “食事の楽しさ”と生活の諸側面の関係に関する研究（Ⅱ）
－中学生を対象とした生活実態調査の結果をもとに－

小谷 正登（関西学院大学）
岩崎 久志（流通科学大学）
三宅 靖子（天理医療大学）
下村 明子（愛知医科大学）
河西 利枝（芦屋市教育委員会）
来栖 清美（NPO 法人 kokoima）

✻ 奥田三郎の教育衛生思想と治療教育方法論
－日本の臨床教育学への寄与－

間宮 正幸（学校法人 共育の森学園）

自由研究発表（A）：一般研究発表
９月２９日（土）１０：００～１２：００
９号館・９２２教室

一般研究・第２分科会

臨床教育学の検討

司　会：庄井 良信（北海道教育大学）
田中 昌弥（都留文科大学）

＊ ナラティブ研究による空間構築に関する考察
ー個と多様性受容への貢献ー
久保田 弘子（アルバータ大学）

＊ 「回復の物語」ではなく「個の物語」に寄り添う臨床
ー不登校・ひきこもり研究と精神科臨床実践からー
廣瀬 雄一（大阪大学大学院博士後期課程・こころのクリニック和ーなごみー）

＊ アンリ・ワロンの発達教育思想を日本の臨床教育学にどう生かすか（５）
ー「子どもの権利」論に着目してー
亀谷 和史（日本福祉大学）
今野 邦彦（藤女子大学）
間宮 正幸（学校法人共育の森学園）

＊ 保育者が認識する「待つ」行為の探究：保育者のナラティブに着目して
宮本 雄太（東京大学大学院・日本学術振興会特別研究員）

自由研究発表（A）：一般研究発表
９月２９日（土）１０：００～１２：００
９号館・９３２教室

一般研究・第３分科会

障害を抱える子ども・若者の自己・自立と共生

司　会：森　博俊（都留文科大学名誉教授）
原　未来（滋賀県立大学）

＊ 肢体不自由のある青年達の「対人関係」の変化と「自己」の育ち
ー朗読劇団に参加する青年の語りを通してー

寸田 さつき（岐阜大学）
土岐 邦彦（岐阜大学）

＊ 肢体不自由のある女子青年のおしゃれの発達的意味
ーなりたい自分に出会うヘアメイク教室の取り組みー

河村 あゆみ（岐阜大学障害学生支援室）

＊ 「障害理解」はいかにして生じ，変容するのか
ー子ども達の「みんなで楽しむ」福祉授業実践からー

砂金 亜実（北海道大学大学院修士課程）

＊ 発達障害等による困難を抱えた若者支援に求められるもの
ー思春期キャリア支援プログラムの意義と可能性ー

原　まゆみ（都留文科大学）

自由研究発表（A）：一般研究発表
9月29日（土）１０：００～１２：００
9号館・９３３教室

一般研究・第４分科会

教育・学校・授業の問い直し

司　会：福井 雅英（滋賀県立大学）
廣木 克行（神戸大学名誉教授）

＊ 教育観と教育実践

守屋　淳（北海道大学大学院）

＊ 授業の中で教師と学生が学びあうということ
－「わからなさ」にみちた世界の中で＜教室＞という場の持つ豊かな意味を問い直す－

荒木 奈美（札幌大学）

＊ 明日も行きたいと思える学校を考える
－処分・強制・競争・管理をしない学校づくり－

浦田 直樹（秋桜高校）

＊ 教育を問い直す場としての補習塾
－1980年代の八杉晴実による不登校生支援を中心に－

田中 佑弥（武庫川女子大学大学院）

自由研究発表（A）：一般研究発表
9月29日（土） １０：００～１２：００
９号館・９３４教室

一般研究・第５分科会

教師・実践家論

司　会：上田 孝俊（武庫川女子大学）
山内 清郎（立命館大学）

＊ 身体感覚の発達を支える教師教育について

東出 益代（武庫川女子大学）

＊ 小学校改革における教育の価値・目的の問い直し
ー子ども・学校についての教師の語りに着目してー

志津田 萌（東京大学大学院修士課程）

＊ 「現象分析」による自立活動の実態把握
ー知的障害特別支援教育における教員の専門性との関連ー

岩井 俊夫（大阪教育大学附属特別支援学校）

＊ 幼少「接続期」の虚構的活動と自立形成の課題

光本 弥生（広島修道大学）

９月２９日（土）　１３：００～１５：００　（９号館９３２教室）

＊　課題研究Ⅰ：現代の子どもと子ども理解

乳幼児期・家庭還元論を超えた臨床教育学的乳幼児研究の共同構築にむけて（２）
―「子育て」の視点と乳幼児・子育ての現実 ―

司　会　者　：　廣木 克行（神戸大学名誉教授）
影浦 紀子（松山東雲大学）
報　告　者　：　小西 健太（子育て中の父親・児童養護施設職員）
小西 正子（子育て中の母親）
長谷 範子（四天王寺大学）
田中 孝彦（教育思想・臨床教育学研究者）

＜企画の趣旨＞

昨年度から，新たなテーマでスタートした本課題研究では，乳幼児期還元論，あるいは家庭・母子還元論とは自覚的に一線を画しながら，乳幼児期・母子関係を臨床教育学はどのようにとらえるのか，また児童期，思春期の子ども理解に当たって，それをどのように位置づけるのかを改めて考え始めている。

昨年度は，母親のおかれた現状とその思いについての報告から，親との信頼関係の形成を抜いた子育て支援はあり得ないことが強調された。また援助者の立場から，問題の発見と専門機関の紹介が援助であるかのような現状と，標準的データと比較して子どもの育ちを評価し，その視点で母親の責任を問うことが多くなっている現状が報告された。またその背後にある政策に注目することの重要性も強調された。

今年度は引き続き，子育て当事者の声に耳を傾け，現在の乳幼児の生活や子育てを巡る現実とその意味を考えていきたい。刻々と変わりゆく現代社会の中で，私たちの想像をはるかに超えて乳幼児の生活や子育ても変化している。その中で変わりゆく乳幼児の姿とともに，変わることのない乳幼児期の本質とその意味を共有していきたい。また乳幼児期・家庭還元論の枠組みを意識的に越え，同時に人間にとって重要な乳幼児期・家族・母子関係を語る視点を追求したいと考えている。環境・関係・体験をトータルにとらえるなかで，乳幼児期・家庭還元論の問題点と「子育て支援」の本質がより明確にされていくのではないだろうか。これらは，乳幼児期のみならず一生に渡る人間発達援助において欠くことのできない発達的な子ども理解の在り方と，発達援助の本質を問うことにつながるのではないだろうか。乳幼児期援助に関わる方々のみならず，さまざまな発達段階，年齢層の人々の援助や研究に携わっている方々との意見交流も期待している。

9月２９日（土）　１３：００～１５：００　（9号館９３３教室）

＊　課題研究Ⅱ：子ども・若者の育ちと自立を支える地域からの共同

援助者が子どもの「生」の課題と関わりながら支えるということ

司　会　者　：　富田 充保（相模女子大学）
原　 未来（滋賀県立大学）
報　告　者　：　森本 宮仁子（大阪聖和保育園）
吉田 朱美（大阪・養護教諭）

＜企画の趣旨＞

幼い子どもであろうとその成育の中で，環境との相互作用の中で，彼・彼女自身の「文化」を構成し続けながら生きている。昨年度の研究大会の自由発表で荒井聡会員（東京都豊島区立東部子ども家庭支援センター）は，問題行動と援助者が解した言動の中に，彼・彼女が築いてきた「判断基準」が隠されており，発達の過程でそれを援助者の「判断基準」で否定されると「相手のことを受け入れることができなくなる」ということを指摘していた。また，本課題研究においても「若者が相談支援のプロセスの中で，率直に自己開示することに共感し」「『適応』させるというより･･･彼らの特性を生かせるような場」を模索することの意義が論じられた。

本部会では「地域からの共同」ということを追究することが課題とされているが，「地域」において特別な意識的取り組みが行われないなら，その地域の課題をも保育・教育の場が受け止め実践する「地域との共同」が模索されなければならない。しかし，保育・教育が「学校スタンダード」という言葉に象徴されるように，子ども・家庭の個別のコスモスを理解することとは隔てられた位置に置かれようという中で，実際にそうした援助職者の姿勢や環境を保持することは困難になってきていることも事実である。「不安定な姿を示す子どもたちの生活と表現を受けとめ，彼らの生育史と内面の感情・思考についての理解を深めること」（本学会設立趣意書）を援助職の「質」の問題と捉えることや，その「質」はどのように「養成」され，また「自己ケア」できるのかを考えたいと思う。

９月２９日（土）　１３：００～１５：００　（９号館９３４教室）

✻　課題研究Ⅲ：発達援助実践と発達援助専門職

発達援助職の情緒的体験と自己理解（２）
― 私の教師としてのありかた：身体と感情に注目して ―

司　会　者　：　今野 邦彦（藤女子大学）
報　告　者　：　佐々木 佳子（札幌市立中学校教諭）
指定討論者　：　間宮 正幸（学校法人共育の森学園）

＜企画の趣旨＞

第６回大会までに，私たちは「身体性」「間身体性」に着目して人間発達援助職の専門性を問うてきた。日本の臨床教育学の構築に貢献する重要な議論を積み重ねたものと考える。
第７回大会からは，研究課題を「発達援助職の情緒的体験と自己理解」と定めて，援助者の（身体性を含有する）情動・感情に関する探求を行っている。これは，第５回大会（北海道教育大学）におけるシンポジュウムⅡ「発達援助における情動・感情の問題」の議論を継承している。もちろん，「子ども理解」と「自己理解」という本学会の基本的な研究課題につながっていることは申すまでもない。昨年の大会では，小学校教師と，元教師で現在はスクールカウンセラーとして活動する会員（臨床心理士）から報告を受けた。「子どもたちの情動・教師の情動」，「教師であるということの臨床的理解」と題打った報告は，それぞれの内的世界，精神生活が語られ独自の自己理解が示された。指定討論と会場の議論を経て，主題に迫る臨床教育学・教育思想の深まりが感じられた。

本学会では，内外の理論に学んで臨床教育学の構築ということを目指してきたのであるが，立ち止まって研究課題を考えてみると，日本には現場で培われてきた，それなりに独自の専門性というものがある。「発達援助職の情緒的体験と自己理解」を問うことから，もっと，日本の「土着」の臨床教育学あるいはその教育思想が練られないものかと考える。

今大会の話題提供者は，中学校で，学級担任，教科としての数学，特別支援教育，相談指導教室の担当者を歴任し，さらに，10 年以上にわたって北大教育学院の《ワロン研究会》に参加して熱心にこのテーマに取り組んできた教師である。「日々，右往左往してきた私」が，欧米由来の教育心理学・臨床心理学だけでなく，古武術から学んだ「構え」があるという。ここで発信される言葉は臨床教育学会員を大いに刺激するに違いない。

９月２９日（土）　１３：００～１５：００　（９号館９２１教室）

＊　課題研究Ⅳ：教師の専門性と教員養成・教員研修

教職大学院の展開と教育現場の課題

司　会　者　：　福井 雅英（滋賀県立大学）・春日井 敏之（立命館大学）
提　案　者　：　北川 健次（近江八幡市立島小学校）
春日井 敏之（立命館大学）
小松　茂（立命館大学）
山岡 雅博（立命館大学）
山本　衛（立命館大学院生）
指定討論者　：　川俣 智路（北海道教育大学）

＜企画の趣旨＞

2017年に小学校，中学校，2018年に高等学校の改訂学習指導要領が告示された。加えて解説は，「総則編」「総合的な学習の時間編」「特別の教科道徳編」「各教科編」「特別活動編」と膨大なものがある。

日々慌ただしい生活を送っている現場の教師の実践を尊重し，読んで指針にしてもらおうという発想や配慮はなかなか伝わって来にくい。その一方では，マニュアル世代の若手教員にとっては，学習指導要領とその「解説編」は学校現場を凌ぐための守りの枠として，歓迎されていく側面も持っているのではないか。

「学校スタンダード」を越えて，いまや「主体的・対話的で深い学び」に象徴されるように，授業内容だけではなく授業方法に至るまで事細かに「国家スタンダード」が提示されているような様相を呈している。このような状況のもとで若手教員が増える中，学校現場や教育行政，民間研究会等においては，教員研修の在り方が重点課題になってきている。

他方では，教員の勤務条件の厳しさや民間の就職状況の好転によって，教員を目指す学生は減少してきている。加えて，国策として「教職大学院」が開設され，私学7大学を含めて，54大学にのぼっており，学部の教職課程と教職大学院における連携した教員養成の在り方も転換点を迎えている。大学においては，児童生徒の実態と課題をふまえながら，同時に学生実態と課題に対応した授業，指導，支援が求められている。

たとえば，学習指導要領の特別活動においては，児童生徒の「自主的な活動」「自治的な活動」「自発的な活動」が強調されているが，これらの点は，創造性を発揮することが求められている教員にとっても重要な活動であり実践課題である。「チームとしての学校」が機能を発揮していくためにも，教員養成と教員研修の現場で，児童生徒の視点と教員の視点の両面から丁寧に議論を重ねていく必要がある。課題研究Ⅳではこうした状況を踏まえ，①学校現場における児童生徒の状況と実践課題，②対応する教員の状況と求められる専門性，③そのために，特に教職大学院における教員養成と学校現場における教員研修の在り方や課題について議論を重ねたい。

９月２９日（土）　１３：００～１５：００　（９号館９２２教室）

❋　特別課題研究：東日本大震災と臨床教育学

震災が子どもたちに与えた心理的被害と援助の課題
― 二次災害・二次被害に注目して ―

司　会　者　：　石井 邦也（大阪聖和保育園）
　　　　　　　　村越 直子（武庫川女子大学）
提　案　者　：　制野 俊弘（和光大学）
　　　　　　　　上田 孝俊（武庫川女子大学）

＜企画の趣旨＞

震災・津波による人的・物的損失などの一次災害に対し，それに伴う火災，水害，有毒ガスの漏えいと拡散，爆発，地盤沈下，東日本大震災では東京電力福島第一発電所の放射能漏れなどの二次災害，さらに，避難所生活などの環境の激変から，体調を崩す，持病を悪化させる，また精神的に追い込まれるなどの深刻な事態の派生（「健康二次被害」と言われている）も確認されてきた。同時に，被災下の生活や心情を踏みにじるような新たな惨事に，直接的に間接的に出会う事例が，東日本大震災調査チームの聴きとり調査でも明らかになった。被災者への無理解，感情への共感のなさ，教育的配慮の欠如もまた「二次災害・二次被害」と呼び，その事実を明らかにし，検討しなければならないと考える。とくに「二次災害・二次被害」の影響は長期化し，変化していくことも留意しなければならない点である。

2018年4月に熊本地裁で，熊本地震で避難してきた親戚の少女に対する強制わいせつの罪で，被告人の男性に有罪判決が言い渡された。2016年4月の地震直後に起こった事案だったが，少女が被害を申し出たのは2017年3月で，「今まで経験したことのない地震の恐怖から落ち着けると思ったのに信頼できる親戚から被害を受け，つらかった」，「言い出せば自分だけでなく家族も追い出されると思って我慢してきた。でも，このままでは他の子にも手を出すと思った」と話していたという（毎日新聞2018年4月17日）。1年間，この少女はだれにも打ち明けることなく苦悩を続けなければならなかったという惨事もまた被ったのである。

阪神・淡路大震災においても，子ども期の震災体験や避難生活での苦悩を語る（語れるようになるまで，出来事の理解がすすむ）のには，安全・安心とともに年月とその後の人生での，自己や他者の理解の場と経験を必要とした。予見的な内容であるか，石本日和子氏は，突然自分を襲った理不尽な震災への「怒り」や「恐怖」，そして救出活動やその後の避難生活で感じた「恥辱」感を心の中にしまわなければ，家族や地域の中で生きることはできなかったのではないか。震災以前からの「問題」も解決したように見えたが，実は抑圧された課題として残り続けたのではないだろうかと述べている（石本日和子「被災体験の自己理解と教師の支援」『臨床教育学研究』第4巻，2016年3月）。

石本氏はさらに援助職（教師）の課題として，「子どもが語りはじめる時を待つ。それは単純なことではなく，16年たって初めて理解できることもあるのだと思う。教師にとって不都合な声もそのまま聴きとろうとまず努力する。教師の物語に合わせて解釈せず，理解を焦らず，しかしあきらめずに考え深める。それは容易なことではないが，そこからしか子どもを理解する道は開かれない。」（前掲書，p.69）と指摘する。

東日本大震災後7年半が経ち，本学会の研究大会でも８回目の議論の場となる。被災した子どもたちが「今」どのような苦悩を胸にひそませ，毎日を生きているか。それをどう教師・援助職はつかみ，考え，理解し，対応しているか。さらに子ども・教育に関わる教師・援助職の「これから」の課題は何か。23年が経つ阪神・淡路大震災後の教育現場の体験もふり返りながら考え合いたいと思う。

9月29日（土）１５：２０～１７：２０　（8号館８３２大講義室）

❋　シンポジウムⅠ：

地域で学びあい，生きあい，互いに人間理解を深める大学教育実践の可能性
ー東大阪大学こども研究センターの実践的摸索からー

ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　：　吉岡 眞知子（東大阪大学こども研究センター長）
報　告　者　：　桑木 敦史（東大阪大学こども学科学生）
辻　梓（東大阪大学こども学部こども学科卒業生・砺波市立種田保育所）
福本 広美（東大阪大学こども研究センターボランティア保護者）
松本 樹理（東大阪大学こども研究センターボランティア保護者）
渡邉 由之（東大阪大学こども学部こども学科）

＜企画の趣旨＞

個人の生（Life）を重視する臨床教育学において，地域に根ざす思想（community based approach）は欠けてはならない視点である。今回のシンポジウムは，この課題に向き合おうとしてきた東大阪大学こども研究センターの 14 年の実践研究の模索を等身大で報告する。

東大阪大学こども研究センターは学内に保育室を用意し，子どもを通して地域の親同士の出会いを支え，子育てを通し地域の方々を支える場所となることを願い，地域の子育て中の親が子どもと共に過ごすことができる場所として，地域に開放しながら活動を模索してきた。そこでは，保育士さんが共に活動し子育てを支える役割をしている。学生も実践研究の場として参加できるようにカリキュラムを編成し，また，自主活動として参加できるようにしている。さらに，地域の子育ての先輩母親もボランティアとして参加していただいている。子どもを通して，地域の様々な世代の人々がつながることができる場となり，互いに人間理解を深める場の一つとして大学が核となり活動できればと考えている。

本学の学生は，教育・保育領域，あるいは企業へ就職していく。その学生たちが社会に出る前に乳幼児と関わり子どもを理解しようとする経験，そして，自分より年上の世代のお母さん方と関わりをもつ経験は幅の広い人間理解へとつながる可能性をもつであろう。

一方，本学のような小規模大学における保育士養成・教員養成をしていると，一人ひとりの学生のこれまで生きてきた生活の現実や生き方，考え方に密に触れることがある。そうして，学生の生活困難を知る機会が多い。彼らの困難と向き合いながら，将来の基盤となる生き方を考えることは容易なことではない。
様々な困難を抱えている若者たちを教育する高等教育の在り方が問われるいま，子どもに関わるプロフェッショナルを育成する教育機関として，問題共有を図るとともにこども研究センターの実践をヒントに大学教育実践の方向性を探ることができればと考える。

プログラム２日目

9月３０日（日）

９：００～	大会受付
９：３０～１０：１０	総　　会
１０：３０～１２：３０	シンポジウムⅡ
１３：３０～１５：３０	自由研究発表（B）実践事例研究

9月３０日（日）１０：３０～１２：３０　（８号館８３２大講義室）

❃　シンポジウムⅡ：

「危機」を生きる教師と教師教育者
― 教職の高度化政策下における臨床教育学の役割 ―

司　会　者　：高橋 亜希子（南山大学）
　　　　　　　伊田 勝憲（静岡大学）
提　案　者　：庄井 良信（北海道教育大学）
　　　　　　　村上 呂理（琉球大学）
　　　　　　　山下 洋児（調布市立中学校）
コメンテーター　：富永（荒巻）りか（東京・スクールソーシャルワーカー）

＜企画の趣旨＞

今日の社会情況の下，学校の教師や教師教育者が「危機」を生きることの意味が，厳しく問われている。ここでいう危機は，社会・制度的な危機であると同時に，教師や教師教育者が直面する人生の自己物語（self-narrative）の危機でもある。それは，時として生存と生活の危機や，学びと生活の危機という「深い経験」として立ち現れる。教師や教師教育者（teacher educator）の危機は，自らの（あるいは職場集団の）教育実践の危機として深く経験されるが，その背景には，制度・政策や，社会・地域（コミュニティ）の制度・政策の危機も潜在していることも多い。

いま，貧困，格差，孤立，分断が，差し迫った社会・地域の問題として顕在化する中で，教師が子ども理解を深めながら，自らの危機を生きることの意味が問われている。そして，危機を生きる教師に臨在し，その声を傾聴し，学問の探究へと架橋していく教師教育者の専門性も問われている。危機を生きる教師のリアルな生活（life）そのもの寄り添い，その声を聴き合い，語り合い，祈るような想いで，探究・研究活動へといざない，そこに伴走しつつ支援する教師教育者の役割も問いなおされている。

「中央教育審議会」の三答申（教員の資質向上，チーム学校，地域と学校の連携・協働）（2015 年 12 月 21 日），「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて―国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議報告書」（2017 年 8 月 29 日）等を受けて，教師や教師教育者に求められる専門性が問いなおされている。その中で，危機を生きる教師の学び（生活）と，教師教育に責任を持つ大学・大学院において，臨床教育学は，どのような役割を果たしうるのだろうか。このシンポジウムでは，三人の報告を受け，カナダの教育学者クランディニン（Clandinin, D. J.）が語った「常識のひび割れから立ち昇る光」を，SSW のコメンテーターや参加者と共に探究したい。

自由研究発表（B）：実践事例研究発表
９月３０日　１３：３０〜１５：３０
９号館９２１教室

実践事例研究・第１分科会

臨床教育学と教師

司　会：春日井 敏之（立命館大学）
氏家 靖浩（仙台白百合女子大学）

＊　臨床教育学におけるリフレクションとは何か

荒木 奈美（札幌大学）
小笠原 はるの（札幌大学）
今田 章子（北海道大学大学院）
野原 竜太（札幌市立中学校）
笹木 陽一（札幌市立中学校）

＊　教職課程における初年次教育と「青年教師」としての自己形成
ー「聞きあい」から「学びあい」への展望と課題ー

井上 大樹（札幌学院大学）

自由研究発表（Ｂ）：実践事例研究発表
９月３０日　１３：３０～１５：３０
９号館９２２教室

実践事例研究・第２分科会

教育実践の検討

司　会：富田　充保（相模女子大学）
池田　考司（北海道教育大学）

❋ 高校探究科目における綴方的授業実践の事例報告
ー大阪暁光高校教育探究コース「いのちの授業」を中心にー

和井田　祐司（大阪暁光高校）
福井　雅英（滋賀県立大学）

❋ 非行少年と共に
ー児童自立支援施設での音楽指導を通してー

石坂　真弓（兵庫県立明石学園）

自由研究発表（B）：実践事例研究発表
９月３０日　１３：３０～１５：３０
９号館９３２教室

実践事例研究・第３分科会

青年・保護者への相談・支援

司　会：間宮　正幸（学校法人共育の森学園）
筒井　潤子（都留文科大学）

❋　発達障害をかかえる青年及び保護者のピアサポートの取り組み
柿原　久仁佳（北星学園大学）

❋　学生の子ども理解概念についての考察
―大学・子ども教育相談の授業実践から―
吉益　敏文（豊岡短期大学）

自由研究発表（B）：実践事例研究発表
９月３０日　１３：３０～１５：３０
９号館９３３教室

実践事例研究・第４分科会

医療・福祉領域における臨床

司　会：松田 康子（北海道大学）
内田 雅志（旭川大学）

✻　**病児と医療をつなぐ遊び（ホスピタル・プレイ）導入にかかわる挑戦**
松平 千佳（静岡県立短期大学）

✻　**福祉型障害児入所施設における子どもの貧困問題について**
森本 創（滋賀県立近江学園）

自由研究発表（B）：実践事例研究発表
９月３０日　１３：３０～１５：３０
９号館９３４教室

実践事例研究・第５分科会

綴ることの意味と役割

司　会：土屋 直人（岩手大学）
山崎 隆夫（都留文科大学）

＊　中学・高校生たちの抱える問題と，その解決の考え方
田中 由美子（鶏鳴学園）

＊　教師の綴方と学校づくり
北川 健次（近江八幡市島小学校）

【第８回大会に関する問い合わせ】

〒002-8502 北海道札幌市北区あいの里５条３丁目
北海道教育大学札幌校　日本臨床教育学会事務局
事務局長　庄井　良信
E-mail：crohde2011@yahoo.co.jp